
マスカーレイドに異常なし！？ 第1話

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスカーレイドに異常なし！？ 第1話

【Zコード】

Z5815A

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第1話はウォルガレンの滝を壊して巨大な宿舎施設を作り、莫大な利益を狙う業者から、滝を守ろうとする住人の話。マスカーレイドの住民は無事にウォルガレンの滝を護ることができるのか？

その1・オートエーガンの朝

ウォルガレンの滝は、知る人ぞ知る名所だった。高さ数十メートルはあろう巨大な滝の上方は雲がかかつており、頂上の存在すら確認されていない未知の滝だ。

流れ落ちてくる清流は透きとおつており、飲用としても重宝される。さらに滝の内側に広がる特殊な鉱石が日光で反射し、水流の中で乱反射を繰り返してはまばゆい光を放つ。

また夜には別の鉱石が、日中に溜めこんだ光を少しづつ漏らし、独特な乳白色で辺りを淡く照らした。

緑豊かな自然には、小鳥のせせらぎが耐えることがない。朝露は木々を輝かせ、風は森と協力して合唱する。

そんな情景に心を打たれた人々が協力し、ウォルガレンの滝との共生を望んで村を作り上げた。

最初は滝を囲むように家が数件建つだけのごじんまりした、小さな村だった。

マスカーレイドと名づけられたその村で、村人と滝との共同生活が平和な時を刻んでいく。

だが、周囲の街が急速に発展していくことで、街と街とを結ぶ交通網の発展から、マスカーレイドの存在が公になつた。

全ての都市から現れた人々はマスカーレイドを通り、全ての都市へと抜けていく。人口よりも、素通りや一泊で去るの方が、圧倒的に多い。

ただ、堅固でない地盤と村人の意向によって、村の発展は急停止を向かえていた。

元々自給自足で生活していた住人は、マスカーレイドの豊かな緑を壊してまで金銭を稼ごうとは考えていなかつたのだ。

反対するものもほとんどおらず、マスカーレイドは混乱一つなくまとまつている。昔もいまもその一点だけは変わらなかつた。

もちろんマスカーレイドを訪れる人々をむげにするわけにもいかない。小さな宿泊施設ができ、人間同士はもちろん、盗賊やモンスターから旅人や住民を守るための自警団が作られた。

外食の施設も少しづつ充実していき、人々を蝕む病に対応すべく病院もできた。はからずも街は大きくなつていった。

それから数年が経過した現在。自然を壊さぬよう努力する住人たちの協力によって、マスカーレイドは現状維持のままだ。

ウォルガレンの滝の美しさ、心の病をも打ち消す雄大さを失うことだけは避けなくてはならない。たとえ、どれだけ月日が流れようとも　それが村人全員の願いだった。

ゆっくりと昇つてきた太陽が、マスカーレイドをたたえるように照らし始める。紅葉が涼風にゆられ、滝から続く清流では小魚の親子が散歩を楽しむ。

住民たちが寝ぼけ眼で一日を始めようと動き出すその頃、マスカーレイドのほぼ中央に位置する食堂『オートエーガン』では、せっせと働く人影があった。

米をどぐその人影は　十七、八歳ぐらいの、赤くきらめく瞳を持つ女性だった。三角巾に花柄のエプロン姿で、まくつた袖は紫色のゴムでとめられている。

米を炊くための釜は業務用らしく、小さく見積もつても直径一メートルはあるだろう。女性が容易にかつげる代物ではない。ましてや釜の中には大量の米と水が入っている。並の男でも重労働のはずだ。だが、その女性にとつて大した労働ではないらしい。何度も何度も米をすすいでは水を捨てるという作業を、鼻歌交じりでこなしていく。

米をすすぎ終わると、水を定量の位置まで注ぐ。それを釜に見合った大きな炊飯器の中へと押し込むと、炊飯のスイッチを入れた。

少し震えつつも炊飯器は稼動をはじめる。女性はそれを確認すると、三角巾を外して額の汗を拭つた。内側から藍色の長髪が姿を現

し、大きく揺れる。

「ふう、下準備はこれでオーケーね」

袖を留めていた紫のゴムを取ると、今度はそのゴムを髪を結ぶのに使い始めた。慣れた手つきでポニーtailを作り上げた女性は、全体重を近くのイスへと預ける。

「終わったのか、ニオ」

ニオと呼ばれた女性は自慢げに微笑みながら頷いてみせた。

「ええ、いつもの通りよ」

「相変わらず、手際のいいこつた」

一升瓶を片手に、にんやりと微笑んでみせたのは、少し離れた場所に座っていたニオの母親のアルマだった。三十代後半で顔にしわが出てきたと気にしつつも、朝早くから夜遅くまで寝巻きのまま、一升瓶をかかえるのが日課の底抜け上戸だ。

「母さんが手伝ってくれれば、もっと楽なのにや」

「手伝うまでもないだろ？ 一人でなんでもできるんだから。さすがはわたしの娘だよ」

「はいはい。近所の人たちはみんな、母さんの子どもとは思えないって言つてるけどね」

すでに諦めてるのか表情一つ変えず、ニオはアルマの目の前にドンと醤油のビンを置いた。中には黄ばんだ透明色の液体が入っている。

「ところで、本物の醤油はどう？」

「なんの話だ？」

「あのね、色を見たら醤油かそうでないかなんて一発で分かるの！」

これ、ラベルは醤油だけど中身はお酢でしょ！」

アルマは豪快に笑いつつ、足元に隠していたビンをニオの前へと差し出した。ラベルには酢と書かれているものの、中の液体は黒い色をしている。

「さすがはわたしの娘だ。一発で見抜いてくるとはな」

「つるさいわよ、この酔っ払い。いい年なんだからいい加減子ども

みたいないだずらやめてよねー。」

「へいへい、怖い怖い」

わざとブルブルと震えてみせるアルマを背に、二オは店頭へと足を向けた。

営業時間ではないので、店内にはだれもいない。これから四つのテーブルとカウンターをきれいにふけば、開店前の準備は万全だ。

「さてと、わざと終わらせちゃうか」

カウンターの内側に備え付けられた簡易の流し台で、ふきんを濡らして絞る。

手始めてカウンターを拭いていると、入り口のドアがおもむろに開いた。来客を知らせる呼び鈴が、チリンと乾いた音をたてる。

「あ、すみません。まだ営業時間じゃ……なんだ、マックスか」

入ってきたお客様に非の打ち所がない営業スマイルをみせていた二オだったが、入ってくるお客様の顔を確認するやいなや、あつとう間にしらけた無表情へと変わつていった。

「おいおい、なんだはないだろ？ 一応お客様なんだから」「

ブルーを基調とした流行の服で全身を覆った青年 マックスは、二オと同じ年か少し上ぐらいだろう。やけと整えられた髪に手をやり、口の隙間から白い歯を覗かせる。

「口をずっと塞いでるつて警つなり、お客様として扱つてあげてもいいわよ」

「堅じこと言つなよ。おれと二オの仲じゃないか」

「どういう仲だつてのよ。まったく」

顔をブイツと背け、店内の清掃に励む二オをにこやかに見守りながら、マックスはカウンターへと座つた。

「まだ開店時間じゃないって、言つてゐじやない」

「いいじやんか。もうすぐ開店なんだかい。お得意さまには親切にするものだぞ」

「お得意さま？ 注文もせずに店に来る女の子をナンパしてばっかりじゃない。それじゃお得意様とは言えないわよ」

「クネスだつて同じようなもんだろ?」

いいながらマックスは視線を後方へと向ける。その先にはいつも開店から閉店までいすわるクネスの特等席があった。

「クネスはいいの。コーヒー一杯だけでも注文してくれるし、できあがつた小説を投稿より先に読ませてくれるんだから」

「まだプロとしてデビューできてないような作品が、そんなに面白いのか?」

「あら。読んだこともないくせに、そんなこと言つなんて失礼よ」二オが言い終わると、まるで呼ばれたかのように一人の客が入ってきた。黒髪におせじにも立派とはいえない服装で、軽く手を振つてみせる。

「いらっしゃい、クネス」

「やあ二オ。コーヒーをお願い」

言いながらクネスは入り口のすぐ横の 入ってきたお客さんから扉の陰になり一番目立たない テーブルへと座つた。

「わかった。ちょっと待つってね」

マックスの存在を無視して、二オは流し台の横でコーヒーの作成へと取り掛かつた。煎られたコーヒー豆の香ばしいにおいが、店内へと広がっていく。

「なあ二オ、今度の日曜日に一緒に出かけない? なんでもイベント会場でぬいぐるみの展示会があるらしいんだ」

「コーヒーを作っている二オのそばへ、ずいと顔を近づける。二オは眉一つ動かさず、コーヒーに視線を注いでままぶつかりほつに答えた。

「もしもし?」

「えつ?」

あつけにとられているマックスに、二オは仮頂面でなおも続ける。

「今の状況でもしもし以外に、なんて言えばいいのかしら?」

「そうだなあ、わあ嬉しい! 誘つてくれてありがとう……とか?」

二オのこめかみにうつすらと青筋がたつていく。それでもマック

スの瞳に動じたようすはなかった。もしかしたらすでに慣れてしまつているのかもしれない。

「飲食店は日曜日がかき入れ時なの。行きたいなら彼女といけばいいでしょ」

「一週間前まではいたんだけどね。またフラれちやつたんだ」「だと思つたわ。毎回フラれると、毎日ここに通つてくるんだから……」

入れ終わつたコーヒーをクネスへと運ぶ。

クネスは執筆中の作品の隅に、いまの会話をなぐり書きしていた。店内で繰り広げられる数々の会話から小説のネタを探す。クネスがこの店にくる大きな理由だ。

「たまにはいいじゃんか。店はアルマさんにやつてもらいなよ」「母さんに？」

「昔はアルマさんが店やつてたんだろう？　だつたら一日ぐら이任せてさ、ニオは羽を伸ばすってのはどう？」

ニオは無造作に髪をかきあげると、諦めた口調で述べた。

「それができれば苦労しないって」

自嘲か苦笑かよくわからない笑みを漏らし、『コーヒーメーカー』をきれいに洗う。

「なあなあ！　いいじゃんか！　一回ぐらいさー！」

食い下がらずに声をかけるマックスを、ニオはいらつきながらにらみつける。

と、マックスの背後の入り口でベルが鳴り、見慣れた人影が入ってきた。

「いらっしゃいショーラ」

「えつ、ショ、ショラ！？」

背後に現れたショーラと呼ばれた人物に、マックスは必要以上に動搖し大きくのけぞつていた。

勢いあまつてイスがひっくり返り、轟音と共に床へと落下する。

「いてえ！」

苦痛に歪むマックスのしかめつ面と思わず漏れた悲鳴が、オートエーガンの中にひびきわたった。そのようすをちらりと横目で確認したクネスは、またもノートの端になにやら殴り書きをしている。「まるで化け物でも見たみたいに、驚かなくたっていいじゃない……」

マックスを見下ろしながら、シェラはふくれつ面で腰に手をやつた。

小麦色に焼けた体を部分鎧で覆いつつ、女性とは思えないほどの大きなツーハンデットソードを帶剣している。

乱雑に入り混じっていた緑色のショートヘアは寝癖なのかファッショーンなのか、一オはいまだに分からなかつた。

「ちょうどこことこひこきたわ。マックス、シェラを誘えればいいじゃない」

「ええ！ シュ、シェラを誘うのか！？」

起き上がりながらちらりとシェラの顔を見やり、椅子へと座りながら二オへと視線を戻す。

「や、やめとく……」

「なんの話か知らないけど、一オを誘えてわたしを誘えないつてのは、どういう了見なのかしら？」

背後から忍び寄ったシェラが、マックスの首にヘッドロックを仕掛ける。グエツと蛙が鳴くようなうめき声と共に、マックスの顔は紅潮していくた。

「わたしの姿を見て急に慌てるなんて、おかしくない？」

「べ、別に慌ててなんか……それより苦しいって……」

「やましいことでも考へてるから、びっくりしたんでしょ」

「やましいことなんてないから、首から手を離してくれえ！」

マックスの渾身の叫びで、ようやくシェラはマックスから手を離した。

「たくさん女性を泣かせた罰よ。思い知つた？」

マックスは何度も咳を繰り返し、落ち着きを取り戻してからシ

ラに弁解を始めた。両手を大きく左右に振りつつ必死の形相で、マックスは声を荒げている。

「違う違う！ いつも泣かされるのはおれの方だつて！」

「どうかしらね……」

マックスの隣へと座り、ショラは二オにコーヒーを注文した。満面の笑顔で注文を受けた二オは、再びコーヒーメーカーを稼動させる。

マックスはむくれつつも、これ以上二オを誘うのは無理と判断したのか、ショラの後ろを通って店の外へと向かつていった。そのついでとばかりに、ショラの後ろでボソリと何かをつぶやく。

「なんですつて！」

突然声をあげてショラが立ち上がり、慌ててマックスは走り出していった。早くも店の入り口へと移動を完了せると、イッシッシュといやらしげな笑いを放ちつつショラに向かつて大きく手を振る。「ショラも恋愛の一つでもすれば、おれの行動がわかるようになるつて！」

「余計なお世話よー！」

腕を振り上げて迫るショラから逃れるべく、マックスは店の外へと飛び出していく。

「マックスのやつ、なんか言つたの？」

振り上げた手のやり場に困りつつもゆづくつと下ろし、席に戻ったショラへ二オが尋ねる。

「ひがんでないで、恋人の一人でも作れ……だつてさ。大きなお世話よ、まったく」

ため息まじりに報告すると、ショラはカウンターに肘をついてあごを乗せた。視線は二オの手先にあるコーヒーメーカー。コーヒーができるのを待つているようだ。

「おまちどうさま。わたしのおじりよ」

完成したコーヒーにミルクと砂糖を多めに入れて、ショラの前へと置いた。かぐわしいコーヒーの匂いがショラの鼻を撫でるように

くすぐる。

「お、」り？」

一オから渡されたコーヒーにゆっくりと口をつけつつ、ショラが聞き返す。一オは小さく微笑みながら、ショラの疑問に答えた。

「マックスを追つ払つてくれたお礼と、ショラへのお詫び」

「お詫び、か……」

カップを皿に戻してから、ショラの口から再び大きなため息が吐き出された。中に残つていてるコーヒーに波紋が生まれ、淵までのわずかな距離を広がっていく。

「なんで……あんなやつ好きになっちゃったのかな？」

ショラの疑問に対し、一オは明確な答えを思いつかなかつた。ただ、ショラの胸に渦巻く焦燥を、ほんの少しでも和ませることはできそうだつた。

「別にわたしもマックスが嫌いなわけじゃないよ。相手を振るよりも振られるほうが圧倒的に多いみたいだし、女の子に対しての優しさも備えてるしね」

「でも、しりが軽すぎるのはじやない。一人の女性だけをずっと愛し続けるなんてできないタイプだしさ。ましてや、わたしみたいな男っぽい女なんてきっとタイプじゃないよ。会うたびにいつも口げんかしてるし……本当に、どうしてあんなやつ好きになっちゃつたんだろ」

頭を抱えてうめくショラの横へと一オが腰をかける。ポンとショラの肩に手を置くと、一瞬ショラの体がビクッと震えた。

「もつと自信持つていいと思うけどな。ショラはとっても魅力的な女性だよ」

「でも、女なのに筋肉質で、傭兵を仕事にしてるんだよ？」

「女だから、男だからって分ける必要はないと思うけど。男も女も千差万別。いろいろな人がいるから面白いんじゃない？」

「そつかな……」

藍色の前髪をかきあげてから、一オははにかむショラと向かい合

つた。照れているのか、シエラの小麦色の顔にほんのりと赤みがさしている。

「そうよ。シエラは美人だし、スタイルだつていいんだから。わたしが男だつたら絶対に放つて置かないよ」

「そつか……ありがとう。なんだか少し気分が晴れたよ。わたしより年下なのに、二オはしつかりしてるね」

「母親がああだからね、しつかりしてないとやつてられないんだよ」カウンターの後ろにある調理場を指差す。馬鹿でかいクシャミが調理場からこだまし、二オとシエラは一人でコソコソと含み笑いをした。

「ほんと、二オに出会えてよかつたよ……」

「そんな、大袈裟な……」

二オは照れくさそうに鼻の頭をかきつつ、時計へと目をやる。八時をすでに少し回っている時計は、オートエーガンの開店を意味していた。

「さて、と。今日もはりきつていくわよ！」

両手を天井へと突き上げ、気合を入れる。クスクスと微笑むシエラと小説に没頭しているクネスを店内に残し、二オはいつたん外へと出た。

出入り口の外側にかけてあるふだをひっくり返すと、クローズからオープンへと表示が変わった。これでオートエーガンの正式な一日が始まったことになる。

オープンの表示を確認し、満足そうにうなづく二オ。その背後から男の声が聞こえてきた。

「おはよう二オ。いつものやつを頼むよ」

声のしたほうを向くと、村にはそぐわない迷彩服とくわえ煙草の男が、二オに向かってウインクをしていた。長身の体と頬を縦断する大きな傷あと。表面からは確認できないが、懷には一丁の拳銃が隠されている。

「いらっしゃいハンターさん。Aランチの肉抜きね」

ハンターがうなずいてみせると、一オは素早く店内へと戻り厨房のほうへと消えていった。

店の中へとハンターが入つていくと、ショラが軽く手を上げてみせた。

「來てたのかショラ。ちょうどよかつた」

「んつ？ わたしになにか用事？」

ハンターはたばこをカウンターの上に備え付けられた灰皿で消すと、シェラの隣へとすわった。ポンとシェラの肩を叩き、意味ありげに口元を緩ませる。

「いい仕事があるんだが、どうだ？ 一緒にやらないか？」

「賞金首でも見つけたの？」

「いや、護衛の任務だ。数日間の工事を無事完了させるために、腕のいい傭兵が何人でもほしいらしい」

「腕のいい傭兵ねえ……」

ショラがじと目でハンターを凝視すると、ハンターは必要以上にあわてながらすぐさま弁解し始めた。

「そりや、おれは傭兵じゃない。ただのしがない賞金稼ぎさ。だけ

ど傭兵として雇われたって十分に仕事はできるつもりだぜ」

「まつ、ハンターの腕なら問題ないだろうけど……ところでその工事つてマスカーレイド内なの？」

「ああ。そうだが」

「だったら工事の護衛は自警団に頼むのがすじつてもんでしょう。どうしてわざわざ傭兵を募集するわけ……ってわたしのコーヒー！」

ショラの飲んでいたコーヒーを横から拝借したハンターが、あつという間に飲み干してしまった。空になつたカップははんたーの手により、早くも流し台へとその居場所を移している。

「馬鹿だなあショラ。自警団に頼めない仕事だからこそ、傭兵が雇われるんじゃないかな」

「怪しい仕事だって断言してるような……」

「おおむね傭兵の仕事なんぞ、怪しい仕事じゃないか」

「否定はしないけどね」

名残惜しそうに流し台のカップを眺めながら、ショラがカウンターを指でトントンとたたく。

小ちなため息をもらしてから、ショラはハンターへと向き直った。「最近仕事もなかつたし、財布の中身が寂しいのも事実だから行つてあげてもいいわよ」

「じゃあ、さっそく依頼主のところへ行こうぜ。晝は急げってな」イスから立ち上がつた一人の前に、ちゅうどい一オが料理を携えて戻つてきていた。

「ハンターさん。Aランチ肉抜き、おまかどりやまー。」

「わりい一オ。やっぱそれキャンセルだ」

「ええ！ もう作つたんだよ！ 作つた後にキャンセルって言われても……」

類をプクーッとふくらませて、肉の入つてないAランチをビんとカウンターに置く。

「まあまあ、金は払うからや。一オの朝食にでもしてくれ。じゃあな！」

ハンターはポケットの中に入つていた小銭を乱雑に置くと、シララをつれて店を出て行つてしまつた。

「朝食についていわれても、おなかすいてないしな……しちうがない。母さんの酒のつまみにでもするか」

置いていった小銭を確認しながら、ボソリとぼやく　が、すぐさま二一オは異常事態に気がついていた。

「げつ、ハンターさんの小銭、Aランチの料金にまったく足りてないじやん！ もう！」

散らばつていた小銭を適当にしまつと、作ったばかりのランチを厨房へと持つて帰る。

店のすみにいたクネスは苦笑しながらも、原稿のすみへと殴り書きを走らせていた。

その2・ウォルガレンの滝の危機

あきらかに違和感を感じたのは、正午になる少し前の時間帯だった。オートエーガンは比較的安価で美味しいものが食べられると近所でも定評がある。マスカーレイドの住民の多くは昼食をここでとるために、昼食時は一番忙しい時間帯なのだ。

それでも二オの母親が店を手伝うことは皆無で、二オは席の埋まつた店内と、火にかけた鍋が並ぶ厨房をかけまわって休む暇などない。

だが、今日のオートエーガンはほとんど席が埋まっていない。朝早くに来たままコーヒー一杯で粘っているクネスを除けば、テーブルに一人とカウンターに一人しかいない。

「今日は商売あがつたりね。なにがあつたのかな」

営業中は店外へと出られないため、マスカーレイドのよつすは訪れたお客様に聞くしか手立てがない。

「たまにはいいかもね、こんなお昼も。毎日働きっぱなしで疲れ……」

…

あぐびまじりにぼやいていると、突然オートエーガンの入り口が開け放たれた。

「大変だよ、大変！」

飛び込んできたのは二十センチ程度の羽の生えた人種 フェアリーだった。動物の皮でこしらえた小さな服で身を包み、腰には帶剣しているかのように見える。ただ、正体は本物の剣ではなく、行き商人であるシェリーに以前売つてもらった小さな針だ。

「フェ、フェミリー！」

二オは思わず叫んでしまった口を、すぐさま両手で塞ぐ。だが、時はすでに遅かつたようだ。

「フェミリーだと!?」

「うわっ、ほんとだ！」

「やばいぞ、巻き添え食らう前に逃げろ！」

日々に暴言をはきつつ恐怖に顔を歪ませ、クネスを除く三人は料金を払わず脱兎の如く逃げ出してしまった。

「ちょっとまって！ 代金未払いだよ！」

二オが慌てて叫んだ時には、すでに三人は店の外へと脱出を完了していた。

「今日は厄日かしら……閉店したほうがいいかも」

「本当、どうしちゃつたんだろうねえ！」

何が原因かまったく分かっていないフエミリーは、エヘヘと笑いながら去つていった三人を見送っている。

二オは深いため息を吐きながら、とほとぼと厨房へと入つていくところだった。それに気づいたフエミリーが慌てて声をかける。

「それよりも二オ、大変なんだつてば！」

「あーあ、確かに大変ですよー。フエミリーがこの時間帯に来てわかつてりや、先に料金を貰つてたのに……」

がつくりと肩を落としつつフエミリーをどかし、厨房の中へと入つていく。それを阻止しようと背後からフエミリーが二オの服をつかんだ。二オはするすると引きずられつつ厨房から引つ張り出される。

「ちょっと、人のせいにしないでよー！」

「どう考えてもあなたのせいでしょー！」

ちつちつなフエミリーの頭を指でつまみ、二オは田の前へと引き寄せた。どんぐりまなこの田をくじくじさせながら、フエミリーは首をかしげている。

「なになに、どうかした？」

「フエミリーが突然来ると客が逃げ出すの。来る時は電話でことわつてから来てつていつてるでしょ？」

「どうしてわたしだけ！ わたしがなにしたつていうのよー！」

「どうやら先週の騒ぎでも、まったく懲りてないみたいね……」

先週の騒ぎといわれ、フエミリーは田線をわずかに上向かせた。

それから小さくポンと手を打つ。

「ああ、ボールを拾つたから、それで遊ぼうってこにくへ来た時のこと?」

「一般的には、あれはボールじゃなくて手榴弾って呼ばれてるんだけどね……」

二オにすゞまれ、フュミリーは苦笑いを発していた。逸らそうとしたフュミリーの視線をすかさず二オが追いかける。

「それも変なゴミがついてるとかいつて、ピンを抜いたやつて……ハンターさんがいたからよかつたようなものの、もつ少しでオートエーガンは大破してたのよ!」

「まあまあ、いいじゃないの。結局爆発しなかつたんだからね」動じたようすもなくペロッと舌を出すフュミリーに、二オは叱る気力を失っていた。

「ああ、もういい。で、なんの用なの?」

頭から手を離すと、ハツと思い出したような顔でフュミリーは機関銃のよみにまくしたてた。

「そりそりー 大変なのよ! H都の業者がマスカーレイドを宿場町にするとかいう計画をたてたらしくて! 手始めにウォルガレンの滝をなくそうとしてるのよ!」

「なんですって!」

「マスカーレイドってあの滝が街に食い込む形で作られてるでしょ? だけど回りは地盤が弱くて、これ以上街を広くできないじゃない。だから、あの滝を壊せばもっと有意義にマスカーレイドの土地を利用できるって! このままじゃウォルガレンの滝がなくなっちゃうよ!」

「そんなこと、マスカーレイドのみんなが許すはずがないわ!」

「もちろんみんなで抗議してるわ。だけどむこうも腕利きの傭兵を雇つたらしくって! このままじゃみんな殺されちゃうよ!」

半べそをかきながら、フュミリーは二オの服の襟を掴んだ。この街の住人のほとんどはウォルガレンの滝に引かれ、地盤の堅いわず

かな土地に建築物を造り、住むことを試みた人々の子孫だ。長寿のフュミリーにいたつては、マスカーレイドが出来た頃には生まれており、住民にちよつかいを出している。

「オもこたぶんに漏れず、この街を作った関係者の孫にあたつた。二オが生まれた頃には祖父母はすでに亡くなっていたが、なにも言われずとも祖父母がここに住みたいと願つた気持ちがわかつた。そしてウォルガレンの滝と共にすこせる昨今に喜びを感じると共に、祖父母に感謝の念をおくつていたのだ。

「どうにかしてよ二オ！ 二オなら顔が広いからなんとかなるでしょ！」

「そつ、そういうわれても……ぐえつ」

唐突の願いにしどりもどりしていた二オの頭を、背後からだれかが押さえつける。

振り向くと、そこにはぎりごと目を鋭くさせたアルマが立っていた。

「フュミリー、そこに案内しろ」

「えっ、アルマさんで大丈夫？」 酔つぱらつてるんじゃないの？」

「酒は飲んでも飲まれるな。わたしは酔つぱらつたことなんかない」「ほんとかなあ……でも人では多いに越したことはないか。こっちだよ！」

フュミリーの案内で二オとアルマは店を出た。後ろにはちやつかりクネスの姿もある。

「クネスさんも行くの？」

「主のいない食堂で留守番しても、注文には応えられないしね。ぼくもあの滝には興味があるし」

「んじや、行くよー！」

二オが表の看板をクローズの状態にしてから、四人はオートエーガンを後にした。

「ウォルガレンの滝を壊すな！」

「マスカーレイドの自然を大切に！」

「心無い建築業者は早々に立ち去れ！」

二オたちが目的地 ウォルガレンの滝にたどり着くと、口々にとなえられる主張に加え、文字で内容を示したプラカードが周囲で乱舞していた。

抗議している人たちは、二、三十人ぐらいか、その中には二オの店の常連も多かつた。

野次馬気分で事の成り行きを見守るのもいるが、眉をつり上げたり目を血走らせている人がほとんどだった。

「あ、アルマさん！ お久しぶりですぅ！」

アルマをみつけて声をかけてきたのは、マスカーレイドができた当時から食料品店を営む『ライクガン』の住み込み店員、とがつた耳に紫水晶の腕輪が目立つエルフのラビだ。

エルフ族に伝わると言われる桃色のワンピースの上に、ひらひらとしたレースのついたエプロンを着用している。びつやら二オと同じく、仕事中に飛び出してきたらしい。

「おお、アルマじやないか！ おまえも一緒に抗議してくれ！ ここのままじゃ本当に滝がなくなっちゃうー！」

ラビに続いたのは『ライクガン』の一代目店長のコキだ。アルマとは年齢も近く、滝の神秘をわかちあえる旧友だ。

藍色のトレーナーと同色のジーンズ、エプロンも着用しているが、ラビのようにひらひらとしたレースはついておらず、ポケットがついただけのシンプルなものだ。

「そのために来たんだ。まかせとけ！」

言うが早いか、アルマは人の波を潛り抜けて、あつという間に抗議グループの最前列に移動してしまった。

「みなさん、お静かに！ いま責任者からお話があります！」

二オもアルマに続こうと人ごみに入り込んだとき、工事関係者が作ったであろう簡易ステージで男が叫んだ。一瞬にして辺りが静まりかかる。

簡易ステージに上がってきたのは、ちょび髭をたくわえた、恰幅のいい背広姿の男だつた。つりあがつた目にメガネをかけて、マスカーレイドの民衆を見下ろしている。

「わたくしがこの工事を管理する最高……いいですか？ 最高ですよ？ もつとも高いと書いて最高の責任者であるレスチア＝クマロフです。以後お見知りおきを……」

手を前に振り下ろしながら、レスチアは丁寧に頭を下げた。だが、その態度が逆にマスカーレイドの住民を逆なでしてしまったようだ。

再び始まる罵詈雑言の中、どこから取り出したのか あるいは最初から持つていたのかもしない 甲高い笛の音を吹き鳴らした。突然の騒音にさわぎがおさまると、レスチアが一度咳払いをしてから話を再開させる。

「わたくしたちは、きちんと王都の許可を得てこの工事に取り掛かるのです。なんびとたりとも、工事の邪魔はさせません」

「だまれ！ 王都が許可を出したつてマスカーレイドの住民が許可を出すもんか！」

住民の一人が拳を振り上げつつ述べた意見は、容易に周りからの支援と同意を受ける。

それでもレスチアは動じたようす一つ見せず、笛を高らかに鳴らすだけだった。

「あなたたちはマスカーレイドの住民である以前に！ 国の住民なのです。あなたたちは国の決定事項には逆らえないんですよ」

悔しそうな歯軋り音や、地団太を踏んでいる民衆の中から、ひょいと手が拳がる。抗議の最前列でレスチアの言い分を聞いていたアルマだ。

「ウォルガレンの滝を壊して、なにをしようっていうんだい？」

アルマの問いにレスチアは一度咳払いをしてから、胸を張つて答え始める。

「よくぞ聞いてくれました。わたくしたちはここの滝をなくし、ここ

に高級ホテルを建てようと計画しているのです。こここの宿泊施設は貧弱で、ないに等しい。せつかく各都市を結ぶ中継地点なのですから、それ相応の施設を作れば、街に滞在する旅人も増える。そうなれば、みなさんの財布も暖かくなり優雅に生活できる。いい計画とは思いませんか！」

胸を張ってレスチアが答える。もちろん、それで納得するアルマではなかつた。

「優雅な生活を送りたいのは、アンタだけだろうが」

「失敬な！ わたくしの真心が……」

話の途中でアルマは簡易ステージの上にあがると、レスチアのあごを握りしめた。

「ウ、ウゴゴゴ！」

「だつたらわたしたちの返答はこつだ。優雅な生活など一切望んでいない。望んでいるのはウォルガレンの滝との共存だ。わかつたらとつとと消えうせな！」

あごを持ったままレスチアをステージへと叩きつける。周りからは拍手喝さいがアルマに向けられ、アルマは両手を挙げて笑顔で周りへと応えた。

「ぐ、くそつ、こうなつたら！ カモーン、傭兵さん！」
痛んだあごを押さえながら、レスチアが大声で叫ぶ。

すると、奥にあつたプレハブ小屋から一人の男女が現れ、簡易ステージへと上がる。マスカーレイドではよく見る顔の出現に、人々がどよめきたつた。

「シーラじやない！ どうしてここに…」

ようやく最前列までたどりついた二オが、出てきた女性に向かつて叫ぶ。

シーラは一瞬しまつたと言わんばかりに顔をしかめたが、すぐさま気持ちを落ち着かせると、二オに頭を下げた。

「わるいね二オ。わたしもこの滝が嫌いなわけじやない。だけど傭兵は雇用人の命令には絶対なのよ

「だつたら、どうしてこんな仕事を引き受けたのよ…」

「初めからこの滝を壊すって知つてたなら引き受けなかつただろうけど……契約を済ませた後に仕事の内容を聞いたから。そこでやつぱりやめたなんていえば、傭兵としての信用は地に落ちる。わたしが今まで築いてきたものがね」

剣の柄を軽く握りながら、シェラは苦笑していた。二オはシェラからもう一人の男へと視線を移す。

「じゃあ、ハンターさんはなんで！」

「おれは賞金稼ぎだ。金のためならなんだつてやる」

二オと目をあわそともせず、ハンターは拳銃に弾を込めなおしていた。一丁は銃身の短いバイソン4インチ、もう一丁はオートマチックのデザートイーグル。ともにハンターのオーダーメイドで、グリップには金色の星の紋章 中にHと描かれている がかたどられている。

「くうー……」

悔しそうにうめきながら、二オはもう一度一人の顔を確認した。平然としているハンターに比べ、シェラは抗議の人の視線に影を潜めている感が強い。

「さあ、傭兵のお二人には前金の分しつかり働いてもらいましょうか！」

レスチアの合図で、シェラとハンターの二人は簡易ステージから民衆の前へと飛び降りた。

二オはざつと辺りを見回してみた。一人の出現で先ほどまでの勢いが無くなり、一步、また一步と後ずさつしていく。

マスカーレイドきつての武道派の二人が相手では、みんなの腰が引けても仕方がなかつた。

「くつ、いつたん引き上げよう。でないといたずらに怪我人を出すだけだ！ なにかいい考えがある人、思い浮かんだ人はオートエーガンへ来てくれ！」

アルマの号令で、みんなが一斉にその場から立ち去つていく。

「フュミコー！」

「なあに、二オ？」

立ち去つ二オがフュミコーに耳打ちをする。フュミコーは無言で頷き、どこかへ飛んでしまった。

逃げる途中アルマは一瞬だけ、簡易ステージ 特にハンターへと視線を送った。ハンターは消えていく民衆のありさまを眺めながら、静かにほくそえんでいる。

「ハンター！ 見損なつたよ！」

「なんともいえ。金がなけりゃ生きていけないんだからな」

「くつ！」

アルマは未練を振り切るように、その場から駆け足で去つていった。

やのう・シハの話題とハンターの欲

「いやいやいやいや、「吉野」「吉野。噂どおりの実力で」からも助かるよ。それで、控え室に戻つてゆつくりしよう!」

レスチアが喜び勇んでハンターたちの控え室へと戻つていく。その背後をハンターとシェラはゆづくりとついていった。

控え室に戻ると、レスチア自ら一人にお茶をつこで回り、バンバンと力強く肩を叩いてきた。

「いやー、本当に心強い。正式に工事が始まるのは明日だが、明日以降も愚民どもがなにやらこちやもんをつけてくるだろ?。今日と同じようにおっぱらつてくれよ」

「そんなことはわかつてない。それよりも工事完了の暁に払われる、前金の十倍の報酬は用意できるんだろうな?」

「当然だとも。わたしは嘘などつかん」

「だったらアンタはふんぞり返つていてくれればいい。あとはおれたちがやる」

クイックとお茶を飲み干してハンターが告げると、レスチアが満足げに何度も頷く。

「では諸君。また連中が来るまでゆづくりと休んでいてくれたまえ。ハツハツハ!」

高笑いと共に、レスチアは控え室から去つていった。工事の準備にでもとりかかるのだろう。

「ハンター。正直わたしは気が乗らない」

ずっと無言でお茶に口をつけっていたシェラが、おもむろに口を開いた。

「ほう、どうして? こんなに金になる仕事は滅多にないだろ?」「確かにそうかもしれない。だけどわたしはウォルガレンの滝が好きだし、一オやアルマや、他のマスカーレイドの人たちだって敵に回したくないんだ」

フムとハンターは頷くと、困惑氣味に顔を伏せているショラに向かって冷たく言い放つた。

「だったら、やめればいい」

「なっ！」

ショラが顔を上げ、ハンターに反論しようとする。それを遮るようにハンターが口を挟んだ。

「おれは金になる仕事があると言つて、ショラはついてきただけだ。金がいらないならいつでもやめればいい。ただし、自ら望んだ仕事を自ら放棄するなど、傭兵にはあつてはならないことだ。これから先、ショラの信用問題にかかわってくるんじゃないのか？ セツキ自分で言つてた通りにな」

歯をくいしばつて、ショラが耐える。ハンターの言つことは正論で、反論の余地がなかつたからだ。

ショラにとつて傭兵という職業は生活の一端を担つてているものだ。そして他の職業よりも信用というものが大きく仕事量を左右させる。信用できない傭兵など、だれも雇わないからだ。

ショラは数年前から傭兵という職に就き、隣町へ移動する商人の護衛といつような小さな仕事から盗賊団から宝を死守するという大きな仕事までそつなくこなしてきた。その努力のおかげで、ショラの傭兵としての信用は高い。

だが、信用を得るのは大量の時と結果が必要なのにもかかわらず、信用を失うには一瞬の時、一つの行動があればいい。

もしショラがいま傭兵としての信用を失いたいと思えば、雇い主であるレスチアを殺せばいい。雇い主に牙を向く傭兵など、だれも雇いはしないだろう。

長い時も、結果を積み重ねる必要もない。

信用は望めば簡単に失えるのだ。

ここで仕事を放棄したとなれば、雇い主を殺したまでは行かななくても、信用は地に落ちるだろ？ 必要だから雇つたはずの傭兵に仕事を放棄されては困るからだ。

そして失った信用を取り戻すためには、今までよりもさらに多くの時と結果が必要になる。

ちょっと仕事を成功させたぐらいで、失った信用は戻らない。それほど信用というものは重くのしかかつてくるものだった。

「まつ、よく考えるんだな。今までの努力を無駄にしてまで、滝とマスカーレイドの連中との共存を望むつて言つなら、おれも止めはしないわ」

ハンターは座っていた椅子から立ち上がり、部屋から出て行こうとした。

「どこへ行くんだ、ハンター」

「おれにはおれの仕事があるんでな。まつ、今日はもう二オたちも来ないだろからゆつくり休みつつ考えるんだな」

部屋から出て行つたハンターを見送ると、シェラは頭を抱えてしまつた。

「どうすればいいんだ。こんな仕事、請けなければよかつた……」

シェラの瞳から一筋の涙がこぼれ落ちる。

うつむいたまま動かなくなつたシェラの横で小さな生物がパチクリとまばたきを繰り返していた。二オに指令を受けて偵察にやってきていたフェミニリーである。

だが、シェラはよほど精神的に参つてゐるのか、フェミニリーの存在にまつたく気づいていない。

フェミニリーは首を傾げつつも、シェラに声をかけることなく控え室から飛び出していった。そのまま空を飛び、オートエーガンへと向かつて飛んでいく。

「ただいまー」

フェミニリーの帰還を心待ちにしていた面々が、暖かく迎えいれる。オートエーガンの中は思つたよりも人が少なく、二オ、アルマ、クネスの他にユキとラビが姿を現してはいたが、他にはだれもいなかつた。

もしかしたら他の住民もそれぞれいろんな場所に集まつて、作戦を

練つてゐるのかもしねり。

「ご苦労様フェミニリー。だれにもみつかなかつた?」

「大丈夫だと思うよ。だれにも追いかけられてないし」

「フェミニリーの大丈夫はあてにならないが、まあ気にしてもしょ
がないな。話を始めよう」

アルマの提案に全員が頷く。まず始めにフェミニリーが得た情報を
みんなに話し始めた。

「工事が始まるのは、明後日からみたい。これから一日間で工事の
下準備やらなんやらをするみたいだね」

「そりや、そうだろうな。来てすぐさま工事できるなら、黙つて開
始するだらうし」

アルマの意見に周りが頷く。フェミニリーは話を続けた。

「レスチアとか言う男はハンターとシェラがわたしたちを追い払つ
たんで、かなり上機嫌だつたよ。それから一人が雇われた条件は、
前金と成功報酬みたいだね。工事を無事に成功させたら、二人は前
金の十倍の報酬がもらえるらしいよ」

「前金がいくらかは、分からぬのか?」

「さあ?」

「それじやあ意味ないだろ……」

五人が一齊にじと目でフェミニリーを見る。フェミニリーは乾いた笑
いを放ちながら、頭をかいてみせた。

「でも前金の十倍でしょ? 傭兵の仕事なら最低でも十万バツツぐ
らいはするんじゃないかな?」

二オが言つと、ユキが頷いてみせた。

「仕入れ先の商人が一つの街を移動するのに一人二万バツツぐらい
は必要だと言つてた。それは傭兵の仕事としてはかなり低いランク
の仕事だからなあ」

ユキの意見にクネスも続く。

「今回の工事が成功してホテルが立てば、それこそ莫大な利益があ
るのレスチアとか言う男に転がり込むんじゃないかな。どうせ滝を壊

すだけではなく、ホテルを造る仕事も請け負っているだらうじ。それを考えれば十万なんて金は、はした金だらうね

「となると……最低でも報酬は百万バツツ？」

全員が一斉にため息をはく。お金のためにショラたちが働くなら、こちらがそれ以上の報酬を準備すればいい。

だが、百万というお金はマスカーレイドの住民にとっては莫大な大金だった。

アルマがレスチアにいったとおり、マスカーレイドの住人はお金に執着がない。生活に差し支えない程度の収入の人人がほとんどなのだ。

「やつぱりショラたちと、戦うしかないのかな……」

唸り声をあげる二オの横で、フェミニーがパツと瞳を輝かせた。

その後まくしたてるように新たな情報を告げた。

「そうそう。ショラはこの仕事を引き受けなければよかつたってかなり後悔してたよ。滝も壊したくないしわたしたちとも争いたくな。でも傭兵としての信用のためには仕事をこなすしかない。そのジレンマにはさまれてるみたいだね」

「それ、本当？」

「もちろん。わたしがすぐ隣で飛んでもまったく気がつかないぐらい落ち込んでたよ」

全員の顔が顕著に曇った。それはこちら側としても同意見だったからだ。

ショラもハンターもこの街に住んでいて、今まで仲良くやつてきていたのだ。できることなら争いたくはない。それはだれの心の中にもある苦悩だった。

「でも、ショラがその調子ならわたしに考えがあるわ

二オが手を上げつつ口を開く。ラビが首をかしげながら、「本当ですか？」

尋ねると、アルマが二オの頭の上に手を置いた。

「わたしに似て優秀だから大丈夫だよ

「街のみんなは、アルマの娘とは思えないっていつも言つてるぞ？」

コキに言われてニオがブツとふきだす。だがアルマはまったく動

じたようすもなく、コブシを振り上げた。

「よし、それじゃあハンターはわたしに任せろ！　アルマ＝グロス＆ニオ＝グロスの親子がこの問題、いつきに解決してやるつじやないか！」

その場にいた全員が勢いよくアルマに続いた。だが、アルマはすぐ腕を下ろし、

「でも今日は眠たいから明日にしよう。工事は明後日から大丈夫だろ」「うう

あくびまじりに寝室へと消えていくアルマを見ながら、一同は不安に包まれていくのだった。

一夜明け、再び簡易ステージの前にマスカーレイドの住民が集まりだした。それを受けてレスチアが、ハンターとショーラを引き連れて現れてくる。

「みなさん、もう諦めてください。滝を壊せばみなさんは金持ちになれる。金持ちということは同時に幸せも手に入るということですよ！」

「だまれ！　すでに我々は幸せなんだよ！」

どこからか発された声に反応して、ショーラとハンターがレスチアの前に出る。ハンターは昨日とまったく変わらないが、ショーラはあまり疲れなかつたのか目の下にくまが出来ている。

「はい、はい、はーい！」

二人の出現を待つてましたとばかりに、ニオが手を上げた。じろりと睨みつけるハンターに首をかしげるショーラ。ニオは含み笑いを漏らしながら、ショーラへと告げた。

「ハンターさんはともかく、ショーラがその気ならわたしにだって考えがあるんだよ」

「な、なによ……」

とつぜん強気になつた二オに不吉な予感でも感じたのか、ショラが一歩あとずさつた。

その様子に自分の作戦が成功するという予感を強めた二オは、自身ありげに腕を振り上げながら大声で叫んだ。

「ショラの好きな人を、ここでみんなに言いふらしてやるー。」

「なつ、なつ！」

瞬間的に顔を真っ赤にしたショラに、周りの住人が野次を飛ばす。慌てふためくショラに追い討ちをかけるように、二オの背後から聞きなれた声がショラの耳に届いた。

「なんだ、ショラって好きな人いたんだ。だつたらおれの気持ちがわかつたつて良さそうだけどなあ」

首をかしげながらも興味深そうに、二オの背後でショラを見上げているのは、マックスだつた。

昨日とは違うものの流行の服という点では変わらない、赤や黄色の明るい色を基調とした目立つ服装になっている。

「う、うあ！ マックス、なんであんたがここにいんのよー。」

「いや、なんか騒がしいからちょっとのぞきに来たところだけ。まさかショラの告白が聞けるとは思わなかつた」

「だ、だれが告白するつて言つた！ 二オがばらそつとしてるだけじゃない！」

予想外の展開にショラは慌てて簡易ステージから飛び下り、二オの両肩をがっちりつかんだ。

「お願ひだからやめて！ そんなことされたらわたし生きていけない！」

「どうしようかな、せつかく聞いてくれる人がこんなにいるんだし……」

「お願ひだから、このとおりだから、勘弁してよー二オー！」

ペコペコと頭を何度も下げるショラを意地悪そうに見下ろしつつ、二オがポツリとつぶやく。

「じゃあ、この仕事から手を引いてくれるよね？」

「あ、あう……」

口をパクパクさせながらがっくりと膝をついたショーラは、二オの問いかけにゆっくりとうなずいた。

「じめんねショーラ、ありがとう」

「これでわたしの傭兵としての信用もがた落ちか……」

「お金に困つたらわたしに言つて。オートエーガンの用心棒兼ウエイトレスで雇つてあげるからセ」

「傭兵が職にあふれてウエイトレスか、トホホ……」
がっくりとうなだれたままショーラは立ち上がると、トボトボとその場を立ち去つていった。

「おい、ちょっと待て！ 前金払つてるんだからきみんと……」
レスチアがしゃべり終わるまえに、パンパンに膨らんでいる封筒がレスチアの腹へと直撃した。分厚い中身と会話から、相当な量の札束が入つてていることだらう。

「前金は返すわ！ あとは好きにやつて！」
ぶつきらぼうに吐き捨てるど、ショーラは立ち去りつと歩みを進めた。そして二オの横でピタリと一度止まる。

「ハンターには気をつけるのよ」

「えつ？」

「なにかわたしに内緒で、企んでるみたいなの。油断したらダメよ

？」

「う、うん……」

あいまいながらも額く二オの肩をポンと叩き、ショーラはそのまま走り去つてしまつた。

「こうなつたらおまえ！ あいつの分もしつかり働くんだぞ！」
ハンターを指差しつつ、レスチアが怒鳴り散らす。ハンターはさして気にしたようすも泣く 左手で耳をほじくりながら 右手をVの字にしてレスチアの前に差し出した。

「シェラの分まで働くっていうなら一人分の報酬を貰わないと割に合わんな。もちろん前金も一人分だ」

「いいだろう。ただし、女の前金はこいつらを追い払ってからだ…」

「ほいほい、了解しましたよ。依頼主様」

ハンターはポケットからたばこを出して火をつけると、大きく吸い込み鼻から煙を出した。

口にたばこをくわえたままあらためてパイソンを抜くと、銃口を二才の眉間に突きつける。

「というわけだ二才。これは遊びじゃないしおれにも生活がかかつてゐる。知り合いでだからといって、好き勝手やらせるわけにはいかないんだ」

撃鉄を起こす音があたりに響き、人々の罵声がピタッと止まる。目の前に銃口を向けられた二才は、シェラを追い払った時の威勢もすっかりかき消されてしまっていた。なすすべもなく、足をガタガタと震わせている。

ハンターが引き金に指をやり、口元を不気味に緩ませる。二才が弾かれるとだれもが恐怖した、その瞬間だった。

「待ちなハンター。だれの娘に銃口を向けてるんだい？」

簡易ステージの上にあがり、ハンターの横へと立っているアルマだった。

「あんたとは長い付き合いだけど、その引き金を引かせるわけにはいかないね」

「アルマか……確かに長い付き合いだな。だったらおれが本氣かどうかわかるだろ?」

銃口が二才からアルマへと向けられる。アルマは軽くうつむきつつ、微笑をもらした。

「あんたに撃てるのかい?」このわたしが

「金のためならな。謝るならいまのうちだ」

改めて引き金に手をやると、アルマが一步前へと進む。

「わたしにだつて大事なものがある。この滝は両親から受け継がれたマスカーレイドの宝なんだ。お金よりもずっと大切なお金では買えない思い出が詰まつてゐる。あんただつてそうだろ!」

「知らない……」

「嘘だ！わたしもあんたも、マスカーレイドを協力して創りあげた両親の子どもだ。あんたとの思い出だってこの滝にはある！それを忘れたとは言わせないぞ！」

「残念だったな」

ハンターの人差し指に力が込められ、銃声がどどろぐ。次の瞬間にはアルマの腹部から鮮血があふれ出した。衝撃でアルマはよろめきながら後ろへと倒れていく。

「忘れたよ。思い出なんていう金にならないものはな」

銃身の先から、煙が昇っていく。それを吹き消してから、ハンターは拳銃を懐へと戻した。

「いやつ、いやあ！ 母さん、しつかりして母さん！」

あまりの出来事に瞬時に反応できていなかつた二オが、慌ててアルマへとかけより手を貸そうとする が、アルマはそれを振り払いながらおもむろに立ち上がった。

撃たれた腹部から血液が流れでは落ち、ステージ上に赤い紋様をきざんでいく。

「ハンター、あんたの心情、確かに受け取ったよ」

ふらふらと足取りを重くして、アルマはその場から立ち去りうとした。

「ど、どこにいくの母さん！」

「アクサ先生の病院だよ。まだ死にたくないんでね」

「じゃあわたしも！」

急いで駆け寄る二オを、憮然にもアルマははじきとばした。他にも駆け寄ろうとした数人が、倒れる二オを見て動きを止める。

「あんたはここで抗議を続けるんだ。絶対に引くんじゃないよ」

「母さん……」

「なあに、足を打たれてるわけじゃない。一人で十分だよ」

無理やりの笑顔で手を振ると、アルマは一人で病院へと向かっていった。

出血したお腹をおさえながら、道路に赤い痕跡を残しつつゆづくりと消えていく。

「さあ、次はだれだ？ おまえか？ それともおまえか？」
ハンターが次々に拳銃を突きつけていくと、抗議のために集まっていた民衆はクモの子を散らすように走り去ってしまった。
残ったのはニオ、ユキ、ラビ、マックス、ニオの頭上で一人才口オロするばかりのフヨミリー。クネスにいたつては木陰に隠れながらようすを伺つているだけだ。

「かわいそうに、母親を撃たれたうえに仲間にはほとんど逃げられ、今の状況はどんな気分だ？」ニオちゃん

「ずつと泣き続けていたニオは、ハンターのひと言で涙を止めた。
震えていた体をピタリと止めて、顔をあげる。ニヤニヤといやらしく笑うハンター相手に、ニオは我を失つてしまつた。

「うあああ！」

雄たけびを上げながら、ニオは一目散にハンターへと突っ込んでいったが、すぐにニオは地面へと倒れこんでしまつた。
ハンターの腕には先ほどアルマを撃つた拳銃があった。どうやらグリップをニオの首筋へとたきつけたようだ。

「まつたく、弱い犬ほどよく吠えやがる」

倒れたニオを見下ろしながらあざ笑うハンター。そのままレスチアと一緒に事務所へと戻り始めていた。

「ハンター！」

ユキが大きな声で叫ぶと、ハンターは振り向きやまに指を二、三度振つてみせた。

「この辺りにはおれが地雷を大量に仕込んでおいた。死にたくないからそこのステージからこちら側には入らないことだな。下手すると衝撃で滝も壊れちゃうかもしれないぜ」

含み笑いが高らかな嘲笑へと変わりつつ、ハンターとレスチアは消えていった。

「ど、どうしましょう店長」

「とりあえず二オちゃんをアクサ医院へ連れて行こう。アルマのようすも気になるし、滝を守る方法も考えないといけない」

周りが大きくなづく。二オはそのままアクサ医院へと運ばれ、先ほどの喧騒が嘘のように滝の周囲は静まりかえつていった。

その4・ウォルガレンの滝防衛作戦

「いやいや、よくやつてくれたハンター君。約束どおりあの役立たずの前金を支払おうではないか」

ハンターたちの控え室とは別の、工事の資料や指揮をとるための簡易事務所に、ハンターとレスチアは戻ってきていた。

黒い革張りのソファーは、プレハブ小屋にはまったく不釣合いだ。残りのスペースには事務のために使われるであろう机が四つ。ハンターはその机の上に腰掛けていた。

ハンターの脇に、先ほどシェラが投げ返した封筒がドンと置かれた。ハンターは中身を確認してから、迷彩服の内ポケットへと入れた。

レスチアがソファーへ全体重をかけ、大きく息をついた。ソファーは迷惑そうに見上げながら、表情を大きくゆがませている。

「それに比べてあの女剣士は見かけ倒しだった。まったく、もうちよつと骨のある悪党はいないのか」

「そりやアンタに比べれば、おれだって骨のある悪党じゃないからな。そういうない」

「ほう、それはどういうア見かね？」

大袈裟にハンターへと指を突きつけ、レスチアはハンターの言葉を待つ。

ハンターは手近にあるファイルの一つを手に取ると、パラパラとめくつて一枚の資料を取り出した。それには工事許可証という見出しにいろいろとかかれており、最後に王都のものである印鑑が押されている。

その許可証をレスチアに突きつけると、ハンターは口元をほこりばせた。

「王都の許可を取ったなんて嘘だろ？」

「な、なにおお！」

慌てふためくレスチアを尻目に、ハンターは持っていた許可証の印鑑部分を指差す。

「あらゆる許可を王都からもらつとき、必要不可欠なのがこの印だ。本来の印章は王都シングマスという表記に続き、王の名前と即位番号が表記されている。だがこの印章には王都シングマスという表記と王の名前は書かれているものの、即位番号が足りない」

「ばかな、そんなはずはない！　今までの印章だつて即位番号など記されていたものはないぞ！」

「普通はわからんだけれどさ。特殊なレンズを通して、初めて浮かび上がる代物だ」

言いながら、ハンターはポケットから直径五センチ程度のレンズを取り出した。

「な、なぜそんなことをお前のよくな賞金稼ぎが知っているのだ！」

「昔、王都で働いてたことがあったのだ。このレンズもその時に失敬したものだ。この印章はこのレンズで見ても、即位番号は記されていない。つまり、この許可証は偽物ってわけだ」

「ぐぐぐ……」

反論できず、ギリギリと歯軋りを立てるレスチアの前で、フツとハンターは表情を和らげた。

「まつ、おれは金さえもらえれば細かいことを言いつつもりはない

「ほ、本当か？」

レスチアの歯軋りが止まり、パツと顔を明るくさせる。ハンターは工事許可証をファイルへと戻した。

「もちろん未払い時には雇い主と言えど牙をむくがな」

ファイルを置くとほぼ同時に、素早く抜いたデザートイーグルをレスチアの眉間に突きつける。だが、レスチアは慌てもせず、逆に不適な笑みを浮かべ出していた。

「フツフツフ、君の言つとおりだよハンター君、確かにその許可証は偽物だ。だがそうなると、きみも相当な悪党だな。偽りの許可と分かつておきながらわたしの手伝いをするのだからな」

「なんとでも言え。そんなことよつせりひと工事の準備を完へさせたほうがいいんじやないか?」

ハンターの意見であごに手をやり、レスチアは小さくうなずいた。
「そうだな。まだ準備は完全とは言えんからな。ハンター君、きみはマスカーレイドの連中が来るまで待機しておいてくれたまえ」「そつさせてもらひよ。工事の手伝いなんてできないし、したくもないしな」

鼻歌を歌いながら事務室を去つていくレスチアを見送り、ハンターはソファへと腰を下ろした。

「さてと、もうすぐ仕事も終わりだな……」

指の骨を鳴らし、腕を組んで事務所を見渡すハンター。一瞬だけ不敵な笑みが浮かんだものの、戒めるよつにすぐさまその笑みは消えていった。

二オの意識が戻ったとき、最初に視界に入ったのは天井だった。体の上下にはふんわりと柔らかい布団の感触、ビタヤリベッドの上にこむらしこ。

鼻をくすぐる薬品のこねいに、白を基調とした清潔感あふれる部屋。

そこがアクサ医院だと理解するのに、そう時間はかからなかつた。「やつと気がついたかい、二オちゃん」

目線を声のほうへと向けると、そこにはコキの姿があつた。隣ではラビが心配そうに手をあわせてくる。

「わたし、どうしちゃつたの?」

「覚えてないのかい?」

コキに向かつて軽くうなづくと、とつぜん首筋に痛みが走つた。

「いたつ!」

顔をしかめつつ首筋を押さえる。触つた限り異常は感じられなかつたが、ラビの目が潤みだしたところをみるとどうでもないら

しい。

「あまり無理はしないほうがいいよ。アクサ先生もそう言っていた」微笑むユキに二オは少し安心していた。ここにもしラビしかいなかつたら、首筋の痛みが重症だと勘違いしただろ？

「ハンターにからかわれて、突っ込んで行つたのは覚えてるかい？」

「うん、なんとなくだけど……」

「二オさんったらハンターさんにからかわれたとたん、とつぜん目の色をえてハンターさんに襲いかかつたんですね！ ラビたちびつくりしちゃって、もうどうなことかと思いましたあ！」

ラビの容赦ない大声に、二オは耳に指を入れて音量を調節する。二オの記憶が正しければ、ハンターへと突っ込んだあと、一瞬にして目の前が真っ白になつたはずだ。

「撃たれるかとおもつたらハンターさん、銃のグリップで二オさんの首筋を殴つたんですね！ 二オさんそのまま気絶しちゃってえ！ 慌てて店長と一緒にアクサ医院まで運んできましたからあ！」

横ではユキが腕を組んで、うんうんと何度もうなずいていた。

「わたし、重かった？」

「そうじゃないですか！」

ラビは二オの寝ていたベッドに、両手をおもいきりたきつけた。「どうしてあんな危ないことをしでかしたのかと言いたいんですね！ 相手は拳銃を持つて二オさんは丸腰ですよー。勝ち田なんてないじゃないですかー！」

顔を二オの側、おでこがくつづくらじまで近づいてきたラビの真摯な目線に、二オは顔を伏せてしまった。

「なんか、悔しかったんだ……」

ボソッとつぶやく。ユキには聞こえていなかつたが、近づいていたラビには十分に聞こえていた。

「だって、ハンターさんとは毎日顔を合わせてたし。いつも談笑して、仲間だつて、ずっと思つてたから……」

二オの目から、水滴が落ちる。あわててラビは身を引き、ポケッ

トの中に入っていたハンカチを二オに手渡した。

だが二オは受け取らず、服の袖で豪快に拭いそつてしまつた。

「困った時とか、いつも相談に乗つてくれてた。その時はお金なんてこらないつて言つてくれたのに。こんなことなら……」「二オ……」

二人は二オを慰める言葉を懸命に搜していた。ラビの皿は再び潤み始め、「コキはあ」とこぶしの上にのせて、顔をしかめている。そんな一人の心配をよそに、二オは拳を振りかざして叫んでいた。「こんなことなら、ランチの肉抜きなんて注文、拒否してやればよかつた!」

コキのあいはきれいにこぶしから落ち、もう少しでイスから転げ落ちそうになつた。ラビにいたつては皿をひつませたまま、周囲から声の出所を探そうと見回している。

「だつて、Aランチつて決めてる仕込みから肉を抜くんだよ! 手間がかかるつたらありやしない! それに料金はランチと同じだけ払つてるんだから、肉の分損してるじやない! お金が大事ならそのぐらい気づけつての!」

「ちょっと、静かにしてくれないかしら?」

呆気にとられてポカーンと口を開けている一人の背後から、メガネをかけた女性が現れた。

金に近い茶色の髪をダラリと腰までのばした風貌は医者とは判断しないが、彼女はれつきとしたここの一院長だった。

「どうかしたのかしら? 他にも病人はいるんだけど……」

「アクサ先生! 聞いてよわたしの話!」

首筋の痛みもなんのその、二オはベッドから立ち上がり、軽い足取りでアクサに近づいていった。

開こうとした二オの口を、アクサがとつて塞ぐ。

「マリモングガガ?」

「気がついてたんなら早く言つてくれない? 用事があつたんだからさ」

「モウミ~。」

アクサは口から手を離すと、二オのポニー・テールをつかんで引っ張つていった。

「いた、いたいって、首筋もいたい！」

「それだけ元氣があるんなら大丈夫でしょ。早くついてきて」

呆然と成り行きを見送つたユキとラビ。最後に思い出したようにユキが声をあげる。

「おれたちはオートエーガンで待つてるからな！ 対策を考えよう！」

「わかった。すぐ行くから待つてね。ちよつと、本当に痛いってば！」

アクサに反抗を続けながらも、二オは引きずられたまま病室から運ばれていった。

別の病室につれてこられた二オは、目の前の光景に愕然としていた。

ベッドで眠っているアルマの顔は、脂汗でびっしょりと濡れていった。布団に隠れた部分は見えないが、この調子では全身を汗で濡らしているだろう。

「傷口から高熱が出ちゃってね……このままじゃ近づいたら亡くなれるかもしないわ」

「亡くなるって……死ぬってこと……？」

「他になにがあるかしら？」

平然と言つてのけるアクサに、二オが食つてかかるうとしたその時、

「二、二オ……」

アルマの口から蚊のすり泣くような声が洩れる。

「さつきからうわ言のようにあなたの名前を呼んでるのよ。ずっと目を覚ますの待つてたんだから」

「おか、さん……」

ベッドの側に歩み寄り、二オがアルマの手をぎゅっと握る。

するとアルマはまるで待っていたかのように、ゆっくりと目を開いた。

「二オ、二オか？」

「母さん！」

涙を目に溜めたままアルマへと抱きつぶと、右手だけで二オを抱き返し、力なくぼやく。

「わたしは、もうダメかもしれない」

「なに言つてんの！ 弱気な発言なんて、母さんらしくないよ！」

娘に怒鳴られ、アルマは苦笑した。直後、抱いていた右手に力が込められる。

「そうだな。こんなわたしらしくない。絶対に生きてみせるぞ」

抱いていた手を離すと、アルマは力いっぱい微笑んでいた。だが、二オは密かに感じていた。思つていた以上に撃たれた傷は深く、アルマの宣告がおおげさではないことを。

「二オ、滝のことは頼むぞ。ウォルガレンの滝はマスカーレイドの宝であると同時に、守り神でもあるんだ。絶対に壊したりしちゃいけない」

「わかつてゐる。絶対に工事なんてさせないから。わたしの命に代えてもね！」

強くアルマの手を握ると、アルマは一瞬だけ微笑を見せた。それも束の間、すぐに表情を暗くし、二オから目を逸らしていた。

「母さん？」

呼んでも返事をせず、アルマはただ呆然と窓の外を眺めているだけだった。

「どうしたの？ 傷でも痛むの？」

「わたしは、母親失格だな……」

「えつ？」

想定外の話題変更に、二オは少なからず戸惑いを見せていた。アルマの目から涙が一粒、頬をつたつてベッドへと落ちていく。

「二オ、前言撤回だ。ウォルガレンの滝はビツつなつてもいい」「えつ、どうして！」

よつやく二オの方を向いたアルマは、再び二オを自分のもとへと抱き寄せていた。

「二オはわたしたち夫婦の宝なんだ。滝よりも二オのほうが大切だ」「母さん……」

「滝を守らうと無理をして、二オには死んでほしくない。自分の命を第一に考えて、余裕があつたなら、滝も守つてほしい。それで十分だ」

二オの肩を軽く叩いてから、アルマは再び顔を背ける。表情は見えなくなつていたが、わずかに震えているのが二オにはわかつた。「ちょっと喋りすぎたみたいだ。疲れたから眠るよ」

「うん、待つてて母さん。次に来る時は朗報を持つてくるからね」「期待しないで待つてるよ」

二オはベッドの側から離れ、深く一礼してから部屋を出でいった。廊下では壁に寄りかかったアクサが、腕を組んだまま二オを凝視している。

「あとはわたしに任せてしまふだい、最善は尽くすから。二オは……分かつてるよね？」

「はい！」

アクサにも頭を下げた二オは、全速力で廊下を走り出した。

「こら！ 病院の中は走っちゃダメ！」

二オの頭の中は滝を救うことと一杯で、アクサの声が届かなかつたようだ。制止に反応することなく、二オは病院を飛び出していった。

目指すはオートエーガン 作戦会議に適した二オ陣営のホームだ。

店内には二オと共にハンターと向かい合つていたユキ、ラビ、マッシュが、一つのテーブルで各々コーヒーを飲んでいた。

加えて入り口横の定位置にクネスがいる程度で、他の客は見当たら

ない。

「お帰り、ニオちゃん」

「ただいま。で、いい作戦は思いついた?」

「それが結構厄介ですね……」

ふさぎこんでいるユキは、田の前のコーヒーを飲み干し、深くため息をついた。

「コーヒー、おかりれますね」

マックスが空になったカップを持つと、カウンター内に入つてコーヒーを作り出す。

「ちょっと、なんであなたがわたしの店の勝手を知りつくしてんのよ!」

マックスの後頭部にげんこつを食らわし、ひるんだすきにカップを取り上げる。

「ほら、さっさと座つて! コーヒーはわたしがいれるからカウントー内に入るな!」

マックスのでん部を蹴飛ばしてカウンターから追い出され、ニオは素早くコーヒーを五人分入れなおした。沸騰した湯が小さな気泡と共に音を出し、カップへと注がれていく。

二オは一人一人の席を順に回り、入れたてのコーヒーを配達した。

「厄介つて、なにが?」

最後に空いた席へとコーヒーを置き、椅子へと腰掛けながらユキへと質問する。

「ハンターが言つには、あの近辺に地雷をいくつか仕掛けたらしくない」

「地雷?」

「踏んだ人はもちろんだが、その衝撃でウォルガレンの滝も破壊してしまうかもしれないというんだよ。これではおのそれと手出しができない」

頭を抱えてしまったユキを、ラビが心配そうに覗き込む。と、店内に轟音が響き渡つた。同時にテーブルの上にある四つの

カップが共鳴する。二オが机に両手を叩きつけ、勢いよく立ち上がつたのだ。

「バツカじやない！ そんなのハンターさんのハッタリに決まる！」

「確かにその可能性は高い。だが、嘘だという百パーセントの確信はない。工事が終わればハンターの仕事は成功となり、その終了過程が滝の崩壊なら、爆発物で片をつけるのが一番手っ取り早いはずだ」

「一ヒーを音を立ててすすつたユキは、苦かつたのか砂糖を一さじほど追加していた。

「地雷を踏む可能性があるのは百パーセントこちらの人間だ。むこうにとつては失つても痛手ではないからね」

「有り得ない話じやないってわけか……」

現状を把握した二オは、ユキと同じように塞ぎこんでしまった。「で、作戦としてはなにができるの？」

「とりあえずいまのところ候補としてあがっているのはこの三つぐらいだ。一オの意見も聞いて、どれにしようか決めようと思つ」

無地の紙に箇条書きにしてあつた作戦を、二オは目だけを動かし黙読する。

ウォルガレンの滝防衛作戦

一 作戦名 ウォルガレンのモグラ作戦 提案者 マックス
II フォール

オートエーガンの庭からウォルガレンの滝まで穴を掘り、敵の背後から奇襲をかける。ハンターとレスチアさえ捕らえれば、相手は士気を失うはず！

二 作戦名 ウォルガレンの爆弾処理班作戦 提案者 ユキ
II ボウ

地雷探知機を使って、地雷を探し出す。解除しながら進めば敵のアジトまで安心してたどりつけるはずだ！

三 作戦名 ウォルガレンのサケ作戦 提案者 ラビ=ラリイ
ウォルガレンの滝から続いているアケイトン川の中を上流に向か
つて進みます。滝まで行けば敵のアジトは田の前のはずです！

「……」

「どうですか？　わたしの案がやつぱり一番ですよねえ？」

無言で固まっている二才に、ラビが追い討ちをかける。

二才は名ばかりの作戦書を拾い上げると、ビリビリと破つてしま
つた。

「ぜんぶ却下！」

「なつ、ど、ビリしてですか！」

ラビが身を乗り出して怒鳴り散らす。ラビ以外の二人も二才の結論
にのけぞっている。ラビ同様に納得できないようだ。

「なんですか？　ラビの作戦は完璧のはずですう！」

「ラビの作戦は間違いなく却下！」

「そんな、ひどいですう……」

涙を目にためて今にもわめき散らしそうなラビを無視し、二才は
全身の力を抜いた。

口から望んでもいられない嘆息があふれ出る。

「いい？　まずラビの作戦が却下のわけは、今の季節を考えてない
から。秋から冬に移ろうかつて時期に川の中なんて通つてみなさい
よ。アジトについた頃には全員凍えてるわ」

「じゃあ、おれのは？」

返事の代わりに、マックスのおでこを人差し指ではじく。

「いまから穴掘つて、滝の側まで開通するのにどれくらいかかると
思つてるの？　ふもとに着いたときには、ウォルガレンの滝の姿は
消えうせてるでしょうね」

「だったら、わたしの案はどうなんだね。時間もかからないし、寒
くもないが……」

腕を組んで見返していくユキに、二才は小さくうなづく。

「確かにこの三つの中だつたら、コキさんの作戦が一番まともだけど……無理なものは無理。だれも地雷の解除なんてできないじゃない」

「たとえそつだとしても、地雷の位置を探知できればそれを避けて進むことができる」

意地でも自分の意見を通そつと、少しムキになりつつあるコキ。二オはめんじくそつに顔をしかめつゝ、頭を搔きながらぼやいた。

「じゃあ聞くけど、この平和な村で地雷探知機なんて代物、だれが持つてゐるの?」

「あつ……」

「肝心なとこを見落としてるじゃない。もし持つてゐる人がいるとしても、きっとハンターさんぐらいよ。もちろん、貸してくれるはずないけどね」

二オの反論はどれも理にかなつてゐるもので、三人は反論できずにうつむくしかなかつた。

「じゃあ二オちゃんは、なにかいい案があるのかい?」

「……あつたら、真つ先に説明してゐわ」

「そうか、そだらうね」

コキは両手をあげて、背もたれへと全体重をうつした。

ギイと寂しそうに鳴く木製のイスは、まるで四人の心情を表しているかのようだ。

「それじゃあ、こんなのどうだ?」

マックスがとつぜんイスから立ち上がると、テーブルの真ん中まで体を乗り出してきた。

つられて残りの三人もマックスへと体を近づける。マックスは一度咳払いした後、小声で作戦を述べた。

「あいつらの作った簡易ステージがあつただろ? あそこで二オがシェラの好きな人を大きな声で暴露するんだ! この作戦で間違いない!」

マックスとて、本気でいつてるわけではないのだろう。場を和ませようとしたマックスの心意気なのだ。

当然三人の反応は予測できたらしく、マックスは素早くテーブルから離れて身構えた。

だが、三人はまったく怒りもせず戸惑いもしなかつた　むしろ微笑をもらしてなにやら楽しそうだ。

「あ、あれれ？　なんだってんだ」

あてがはずれてマックスは、全身から力を抜いた。とたんに、肩の上へと誰かの手が乗せられた。同時に力が込められ、マックスの肩が嫌なきしみ音をもたらす。

「いてつ！　だれだつ！」

首だけ振り向かせた瞬間、マックスの顔から血の気が引いていった。三人の微笑が、爆笑へと変化していく。

「いい作戦だね、マックス。わたしも参加したくなっちゃう」

口元を痙攣させながら現れたシェラは、マックスをつかんだ手に更なる力を込める。長袖のシャツにジーンズというラフな服装武装を解除しているシェラの姿だ。

「シユ、シユラ！　これは誤解だ！　おれはハメられたんだ！」

「どっちでもいいから、ちょっと奥まで来てくれる？」

店の隅へとひきずられていくマックスに、三人は手を振る。続くは二オの送る言葉。

「じゃあ五分間休憩にしようか。シェラも五分で終わらせてね！」

「そ、そんな殺生な！　うぎゃああ！」

それからの五分間、マックスの悲鳴が続いたのは言うまでもない。

その5・事の真相

「さてと、休憩は終わり！ で、ショラはなにしに来たの？」

「なにしに来たとは、ご挨拶ね。ウエイトレスとして雇ってくれるつていうから、こうして武装解除して尋ねてきたんじゃない」

「そつか、そうだったね……ごめんなさい」

謝る二オを尻目に、ショラはマックスが座っていた椅子に腰をかけた。

当のマックスは店の隅でうつ伏せで倒れ、ボロボロになつた服のまま動いていなかつた。が、だれも心配していない。
「いいえ、ラビがマックスを、どこから持つてきたのか分からない木の棒で何度もつづいているぐらいだ。

「いいのよ。わたしあここの仕事はあまり乗り気じゃなかつたからさ。やめるためのいい口実が出来たと思えば」

「でも、傭兵としての信用はガタ落ち……」

顔をうつむかせた二オの肩を、ショラは軽くポンと叩いた。

「気にしなくていいの。傭兵の仕事しかやつたことなかつたから、ウェイトレスなんて、ちょっと新鮮で楽しみでもあるからさ」
笑い飛ばすショラだが、二オはショラの横顔にかけりが浮かんでいる気がした。

「で、わたしはどんな仕事をすればいいのかしら？」

「ちょっと待つて。確かにウェイトレスとして雇うとは言つたけど。いまはそれどころじゃないの」

「なんだ、ウォルガレンの滝の件まだ片付いてないの？ レスチアなんて小物、ハンターさえどうにかすればすぐに尻尾を巻いて逃げていくでしょ？」

「そのハンターがどうにか出来ないから困つてるんだよ」

ユキに言われ、ショラはあっさりと納得してしまつた。そのやりとりを横目で眺めながら、二オが突然手を打つ。

「シエラに聞きたいんだけど。ハンターが滝の回りに地雷を仕掛けた可能性つてある？」

「地雷？ どうからそんな発想ってきたの。あるわけないじゃない」「だが、シエラが知らないうちにハンターが地雷を仕掛けたという可能性があるだろ？」

ユキの意見にシエラは首をかしげて、逆に質問してきた。

「それって、いつ言われたの？」

「シエラが走り去ったすぐ後だが……」

「だったら間違いなく大丈夫ね。もしわたしが知らない間にハンターが地雷を仕かけたって言うなら、わたしにも教えてくれるはずでしょ？ わたしとハンターは一緒に控え室から出てきた。わたしに地雷の場所を教えておかないと、わたしが踏んじゃうじゃない」「一オとユキががつちりと握手を交わす。そのまま一人はシエラへと向き直り、

「間違いない？」

同時にシエラへと聞き返した。

「ハンターが最初からわたしを捨て駒に使おうとしてたって言うなら、話は別かもしれないけど、今日の朝の時点では味方だったんだから、もし地雷を仕掛けていたら、踏まないようになんか場所を教えてくれるんじゃない？」

「確かに……」

ユキが頷く。一オは腕を大きく振り上げると、威勢のいい声で叫んだ。

「よし！ 作戦決定！ 正面突破でハンターとレスチアを捕まえよう！」

はりきつて店を出ようとすると一オとユキに、背後からボソリとシエラがつぶやく。

「ハンターに撃たれずに、無事帰つてこれたら褒めてあげるわ」現実に引き戻され、一オはがつくりとその場にへたりこんだ。

「そうか、いくら地雷がなくてもハンターさんには一丁の拳銃があ

るんだ……」

「オーダーメイドの上に、使いやすいよう丁寧にカスタマイズされた拳銃がね」

二オがハンターの射撃を目にしたのは、今日が初めてだった。だが、噂で何度も聞いている。ハンターが狙つた部位を外すなんてありえない。

それがたとえ、腕であろひつと、膝であろひつと　もちろん、眉間であろうと。

「やつぱダメじゃん！　コキさんのバカ！　もつひょっと考えて行動してよね！」

「えつ？　えつ？」

不意をつかれたのとぬれぎぬがかぶさり、コキは年甲斐もなく才口オロしていたが、咳払い一つで何とか心を落ち着かせた。
「ど、とにかくだ。みんなも疲れているだろうし、ひとまず解散といふことはどうかな？案外、一人で黙々と考えたほうが妙案が浮かぶかもしれないぞ」

「だけど、工事は明日からなんだよ？」

悲痛な声で叫ぶ二オに、コキは優しく微笑みかける。

「明日の早朝に、再び集合だ。実現可能とハンターをどうするかという点を重点的に考えれば、きつといい案が生まれるはずだ」

それぞれがユキの提案に納得し、帰宅を始める。

二オはそれらを見送った後、店内へと戻つた。そのまま呆然としている二オの頭に、一つの団体がよぎる。

「そうだ。自警団に頼めば……」

手早くオートエーガンの戸締りを完了させると、二オは自警団の事務所へ走り出した。

マスカーレイド内の住民はもちろん、旅人や商人などがからんだいざこざのために作られたものだ。

「だれか、だれかいませんか？」

二オが事務所内に飛び込み声をかけると、中から壯年の男性が姿

を現した。自警団の団長であるノルン＝レイジスである。

ノルンは白地に黒で染められたカズラに、黄色の十字架がかたどられた制服を上手に着こなしていた。加えて団長の証である紋章入りのブローチが、胸できらりと光っている。

「二オか……なにか事件でもあったのか？」

「大事件ですよ！ ウォルガレンの滝が破壊されようとしているんですよ！」

「その話か……」

ノルンは事務所にある椅子に腰をかけ、タバコに火をつけた。立ち上る煙をぼんやりと眺めながら、二オへと返答する。

「王都の許可を持ってきているんだろ？」

「だけど！」

「だったら、わしらの仕事はない。わしらの仕事は規律を乱すものや、マスカーレイドに騒動を持ち込む連中の相手だ。許可を得て工事をする業者に、口を出すことなどできるはずがないだろ？」

「だったら、どうして自警団に工事の護衛を頼まないんですか！ やつぱりどこかおかしいですよ！」

「連中の考えることなど、わしは知らんよ」

煙を吐き出しつつ、ノルンが付け加える。

「まあ、二オたちの気持ちも分からんでもない。わしもあの滝が好きだからな」

「だったら！」

「明日になれば、全てが終わる。二オにできることは、歯を磨いて寝ることだけだ」

「全てが終わるって……滝が、壊れるってことでしょう！ そんなときに平然と寝てなんていられません！」

ダンシと机を両手で叩きつけ、鬼の形相で二オはノルンをにらんだ。だが、ノルンは顔色一つ変えず、灰皿でたばこの火を消しだけだった。

「もういいです！ 自警団には頼みませんから！ わたしたちの宝

はわたしたちで守つてみせます！」

二オはきたときと同じように、勢いよく事務所を飛び出していった。涙を流しながら布団へともぐりこみ、一晩中泣き続けた。

次の日の早朝、店内にはヨキとラビしか姿を現さなかつた。他のメンバーーや毎日欠かさず現れるクネスさえ、今はいない。

それぞれが持ち寄つた案も、あまり良い案とは言えなかつた。ショーラが単身ハンターへと勝負を挑む、工事のための機械を破壊するなどという意見から、レスチアを暗殺するなどという危険な意見までが揃つたものの、やはりハンターと、その拳銃の腕前が全ての作戦への強大な抑止力として働いていたため、実現は難しそうだつた。どんな作戦でも共通でクリアしなければいけない条件　それはハンターに見つからないことだ。

ハンターがどこにいるか、なにをやつているかを把握するのは、そう容易ではない。

たとえみつからずに作戦を実行できる地点へと移動できたとしても、騒ぎを聞きつけられればきっとハンターは駆けつけてくる。

そうなれば滝の破壊を阻止しようとしている実行部隊は全員、蜂の巣だらう。

「もう、ウォルガレンの滝を救つのは無理なのかな……」

思わず呟いてしまつた二オは、大きくかぶりを振つた。ここで諦めてしまつてはレスチアの思う轟だ。そしてアルマの願いも水泡と化してしまつただけ。

「行こう。ウォルガレンの滝へ」

暗色漂うマスカーレイドの店内で、二オが悠然と立ち上がつた。

「二オ、いい考えが浮かんだのか？」

二オは小さく首を横に振つた。だが、二オの表情には諦めたようすはない。

「だけど、黙つて滝が壊れるのを傍観しくわけにもいかないでしょ。行動しなければ結果は出ない。見たり考えたりしてるだけじゃあ、何も始まらないよ！」

茫然自失だつたユキとラビは、二オの力強い言葉で、死んでいた目に光を取り戻していた。

「そうだな。黙つても勝手に壊されるだけだ。声を大にして訴えれば、なにか奇跡でも起こるかもしれない」

「奇跡に頼るなんて情けないですけど、確かにそうかもしれませんねえ！」

三人は勢いよく、オートエーガンを飛び出していった。最後までウォルガレンの滝の存続をかけて戦うために。

三人が滝に着くと、クネス、シエラ、フェミリーと包帯と絆創膏で身を固めたマックスがすでに簡易ステージの前に集まっていた。どうやらオートエーガンに姿を現さなかつたのは、直接ここに来たかららしい。

他の住民は「どうと、ほとんど姿がみえなかつた。昨日のハンターハーのアルマに対する発砲で、住民は恐れおののいているのだろう。みんな！」

「早く二オ！ なにかいい考えが浮かんだんだろ？」

クネスの問いに二オは無言で首を振つた。全員の肩から力が抜けていく。

「ハツハツハ、無駄なんですよ。無駄！」

簡易ステージの上にはレスチアの姿があつた。腰に手を当てて、高らかに笑い声を上げている。

「お願ひだから、ウォルガレンの滝を壊すのはやめてよ…」

「そうは参りません。もう予定は出来上がつてますよ」

そう言いながらレスチアは、手に持つていたくるくる巻きのポスターを開いてみせた。

そこにはウォルガレンの滝跡に造られるであろう、巨大なホテルの完成予定図がしるされていた。パツと見ただけでも二、三百人の人間が泊まれそうだ。

「このホテルが完成した暁には、マスカーレイドは単なる通過点で

はなく、素晴らしい宿泊街へと変わるのです。そうすれば一オさん
の店にも多くの人が訪れるでしょ？」「

「そんなにたくさんお客さんがきても、わたし一人じゃ捌ききれな
い」

「いいじゃないですか。そこにいる用心棒兼ウエイトレスに活躍し
てもらえば」

皮肉を言われ、シヨラの表情にグッと力がこもる。
「さあ、もうすぐあの滝が崩れ落ちる。そのまま一緒に眺めよう
じゃないか」

ちよび髭をいじりながら、レスチアが後ろを振り向く。そこには
事務所から歩いてきたハンターの姿があつた。

「おおっ、ハンター君。君も一緒に眺めようじゃないか。あの滝が
崩れていくさまは想像以上に豪快だと思つぞ…」

興奮気味に語るレスチアの申し出に、ハンターは無言で首を振つ
た。

「悪いが、その申し出には賛同できない」

「ほう、どうして？」

「その前にあんたが捕まるからさ」

「そうかそうか、わたしが捕まるからか。わたしが……な、なにい
つ！」

驚き戸惑うレスチアは、おもむろに一步後退した。それを追うよ
うにハンターは、懐からザートイーグルを素早く抜いて、レスチ
アの眉間に突きつける。

「おかしいとは思わなかつたのか？ これだけ大きな騒ぎをしてい
ながら、自警団がなにも言つてこないなんて」

「それは許可をきちんと提示したから……」

「許可を自警団で確認してたとしたら、逆に反抗する民衆を抑えに
かからないといけないはずだ。違うか？」

「ど、どうこいつなんだ！」

「簡単なことだ。おれが自警団の依頼を受けて内部の調査を行つて

いたのや」

フツと一瞬だけ笑うハンター。だが、その笑みはレスチアではなく、ニオに向けられていた。

「証拠はそろつた。王都が発行したと偽つた許可証に、それを認めた発言が録音されたテープ」

言いながらポケットから出したテープを再生する。そこにはハンターとレスチアが事務所で話していた内容が、きれいに録音されていた。

「ついでにあんたの写真も添付しておいた。これで逃げてもお尋ね者だぜ」

「く、くそっ！　だれか！」

「おつと、従業員はみんな逃げ出したぞ」

「な、なにおお…」

顔を真っ赤にして抵抗しようとするレスチアの腹に、ハンターはけりを一撃加える。それだけであっさりとレスチアはうずくまつてしまつた。

「おい、フェミリー」

「へつ、わたし？」

ハンターたちのようすを呆然と見ていたフェミリーは、突然の指名に泡を食いつつ自分を指差す。

「自警団の事務所までひとつ飛びしてくれ。すべて終わつたってな」「は、はい！」

フェミリーは慌てて事務所の方向へと飛び立つていつた。

その後数分後には、自警団の団長であるレスチアと部下数名が現れていた。部下も団長と同じ格好ではあるが、階級がないのかブローチのようなものはついていない。

「おいつ、しつかり歩け！」

自警団に連れられ、レスチアは連行されていった。

「フツ、わたくしを甘く見ないことだ。いざれわたくしが笑い、お前たちが泣く日が来るということを肝に銘じておけ！」

去りぎわに捨てゼリフを吐き、レスチアは自警団の事務所の方角へと連れて行かれた。

その後、王都の裁判所へと運ばれ、判決が下されるのだ。

「よくやつたなハンター。報酬は後で事務所まで取りに来てくれ」ノルンが言つと、ハンターは両手を軽く挙げてみせた。

「なーに、今回は無償でいいさ。おれもこの滝を守りたかったし、あいつがくれた前金がなかなかの金額だつたんでな」

ハンターの好意にノルンは敬礼を返すと、部下の後を進んでいった。いまだに現状を理解できていない二才の肩を、ポンと叩く。

「言つただろ？ 二才にできることは歯を磨いて寝ることだけだと」「二才は目を丸くしたまま、無意識に頷いていた。そのままノルンは姿を消していく。

「さてと、一件落着つてわけだ。聞きたいことがあるんなら一人ずつどうぞ？」

たばこに火をつけつつ、ハンターは簡易ステージの上に座つた。「じゃ、じゃあまずわたしからいかい？」

ユキが手を上げると、ハンターは軽く手を差し出した。どうぞというしぐさだらう。

「ハンターは最初から自警団に雇われていたのかい？」

「ああ。怪しい連中が滝の周りに集まりだしてるから、なにをしようとしているのか調べてくれってな。まつ、依頼がなくてもおれはやってただろうがね」

煙をフーッとふき出しつつ、ハンター。まつたく悪びれたようすはない。

「それじゃあわたしを誘つたわけは？」

シェラがユキに続いて質問する。ハンターはたばこの火を消し、両手を後ろに伸ばして体を支えた。

「本当は調査の協力をしてもらおうと思つたんだが。途中で気が変わつた」

「気が変わつた？」

「シーラがあんまり仕事に乗り気じゃなかつたようだから、やめるよつに仕向けたのさ。シーラが抜けた後に ore が場を丸く治めてしまえば、当然おれの評価は上がる。それを利用したつてわけだ」「じゃあ、なんでそれを早く説明してくれなかつたんですかあ！」

ラビの反論に、ハンターはブツと吹きだした。

「当たり前だろう。レスチアの前でそんなことを言えるわけがない」「だつたら、合図というか……どうにかしてわたしたちのだれかに伝えようとか、思わなかつたんですね？」

クネスの問いに、ハンターはなぜか首をかしげた。まるでクネスの質問が的を外しているかのようだ。

「聞いてないのか？ アルマから」

「アルマ？ アルマつて二オの母親のアルマかい？」

「他にだれがいるんだ？」

アルマといふ名は、この街に一人しかいない。そこでずつと黙つていた二オはようやく声を張り上げた。

「だつたらどうして……どうして母さんを撃つたのよ！」

簡易ステージの上のぼつた二オは、容赦のない平手をハンターの頬へと叩きつけた。

「ちよつ、落ち着け二オ！」

「つるさい！ 言い訳なんか聞かないわ！ もし本当に自警団の任務で最初からあいつの企みを阻止するつもりだつたら、母さんを撃つ必要はなかつたはずよ！」

「だから、話を聞けって！」

ハンターの制止をきかず、二オはハンターの体中を叩きまわした。慌ててユキが二オの暴挙を止める。

「待つんだ二オ！ ハンターの話を聞こつけじゃないか！」

「だつて、だつて！ 母さん死にそなんだよ！ ハンターさんのせいだ母さん死んじやうかもしれないんだよ…」

ユキの手の中でじたばたと暴れる二オ。よつやく二オの暴行を潜り抜けたハンターは、ゆっくりと立ち上がりつつ頭をかいた。

「まったく、落ち着いて話を聞けって……」

「落ち着いていられるわけ……ンガガ！」

まくしたてる二オの口を、ラビが両手で塞ぐ。辺りが静まり返るのを確認してから、ハンターは話しあじめた。

「あんなあ、おれが本当にアルマを撃つたとでも思つてゐるのか？」

「ンググググツ！」

ラビの活躍のおかげで、二オの反論は意味を成さなかつた。

「おれが撃つたのは普通の銃弾じゃなくて、ペンキの入つた着色弾だぞ？」

「グツ？」

暴れていた二オの動きが止まり、コキヒビがゆっくつと手を離す。

「着色……弾？」

ハンターは答えず、鼻歌を歌いながら拳銃に銃弾を込めなおしていた。そして突然、ハンターの銃身がシェラへと向けられる。

パンツ！ という乾いた音と共に、シェラの腹部に赤色が広がつた。

シェラは信じられないものを見るように赤くなつた腹部に手をやると、赤色が手に付着する。

「ハンターさん！」

二オが声をあげるのを手で制し、ハンターはゆっくつヒシヨウへと尋ねた。

「痛いか？ シエラ」

シェラは自分の手を震わせながら、ゆっくつと首を横に振つた。

「全然痛くないわ」

「ええつ！」

二オは慌ててシェラへと駆け寄り、付着した赤色をわると、合させて臭いも嗅いだ。

「ただの、ベンキじゃない、これ」

「そういうことだ。普段は道に迷いそうな森の中なんかで、目印と

して使うんだけどな」

ハンターは拳銃を懐にしまい、ニオリと微笑んでみせた。

「それを利用してアルマにメッセージを送ったんだが、まさか伝わつてなかつたとはな。おれの心情は受け取つたって言つてたから、真意は分かつていたはずなんだが……」

首をひねるハンター。だが、現実にアルマは入院している。それで二オが納得できるはずもない。

「でも！ 母さん入院してるんだよ！」

「はっ？」

「腹部の傷が原因で重体だつて！ 脂汗かきながら二オ、二オつてうわごと言つて！」

二オの訴えを聞いたハンターは、あごに手をやり考えるじぐさを見せた。

「二オ、おまえその傷確認したのか？」

「くつ？」

「おれがくつた弾痕だよ。ちゃんと確認したのか？」

「い、いや……でもアルマ先生が……」

おたおたし始めた二オに、ハンターは顔を伏せながら口を緩ませる。

「二オ……」

「も、もしかして？」

ハンターはこっくりと頷いた。

「おまえ、遊ばれてるぞ」

「うそでしょ……」

「自分の命ですらいたずらの種に使つ。アルマの得意技だからな。おれも何度も騙されたことか……」

信じられないといった表情の二オも、心中では納得していた。

二オの母親はいたずら好きで、先日も醤油と酢の中身を変えているというだれにでも分かるいたずらがあった。

調味料だけではなく、いろんないたずらを細部にしかける。それ

も、忘れた頃にやつてくるのだから性質が悪い。

だが、それが酒と同じじくアルマの生きがいなのだ。

「わたし……ちょっと病院に行つてくる」

引きつた笑みを浮かべながら、二オは一人病院へと向かつた。こめかみにつつすらと青筋が立つている。

「ありやりや。こりやさすがのアルマも大目玉だな」

「まあいい薬にはなるだろ」

「アルマさんがちゃんと役田を果たしていれば、大騒ぎにならずにすんだんですね」

だれもアルマを助けに行こうなどとは言ひ出せば、むしろ喜んで二オを見送つているように見えた。

病院の中はあまり忙しくないのか殺伐としており、看護婦の姿がちらほらあるだけだ。

二オはアルマの病室へと急いだ。部屋の名前を確認してから、おもいきり扉を開く。

「母さん！」

田の前の光景を、二オは疑いたくなつた。

そこには、酒を飲みながらアクサと談笑しているアルマの姿があつたのだ。

だが、果然と田の前の光景に立ち戻りしている二オにアルマは気づくと、慌ててお酒を隠して布団の中へともぐつてしまつた。そばにいたアクサが、すかさず霧吹きでアルマの顔に水をかける。どうやらこれが脂汗の正体だつたらしい。

「二オ……母さんはもうダメかも……」

この期におよんでもまだ重体の演技を続けるアルマに、二オは肩を震わせながらつかつかと近づいていく。

そのままアルマの頭を、そばにあつた雑誌でおもいつきりはたいていた。

「いたつ、なにすんだ親に向かつて！」

「つるさこうるさい！ 当然でしょこれぐらい！」

床に雑誌を放り投げ、二オは力なく膝をついた。

「本氣で、心配したんだからね。母さん死んじやつたらどうしようつて、本氣で心配したんだからね！」

淡い吐息に加え、乾いていた目から再び涙がこぼれる。

そんな二オの肩をアルマはポンと叩き、続いて二オの髪をくしゃくしゃにかき混ぜた。

「なにすんのよ！」

「わたしの芝居も捨てたもんじゃないな。無事だつたからできる他愛のないいたずらだから、気にすんな」

「言える立場じゃないでしょ！」

お互いから飛び交う罵詈雑言。止めたのはアクサの一聲だった。

「静かにしなさい！ ここは病院なのよ！ アルマもバレたんだからもう退院！」

「ええ、もうちょっと入院しどきたいな」

「ダメよ。せっさと帰った帰った！」

ぶつくさ文句をたれながら、一人は病室を後にしようとした。後姿を見送りながら、アクサは二オだけを引き止める。

「二オ、アルマを許してあげてね。照れくさくて普段いえないようなことを、この機会に言つておきたかったのよ」

「それって……」

「フフツ、いつまでも仲良くオートエーガンを経営してね。わたしも近いうちに夕食でも食べに行くわ」

「はいっ！ ありがとうございます。アクサ先生！」

深くお辞儀をした二オに、遠くからアルマの声が響く。

「おーい、なにしてるんだ！ 早く帰つて飯を作ってくれよ！ 病院の食事は量が少なくて腹が膨れないんだ！ 味も大したことないし！」

「ちょっと、失礼でしょ母さん！」

代わりに謝る二オを手で制し、入り口近くまで移動していたアル

マにアクサが叫ぶ。

「悪かつたわねアルマ！　あ、それと昨日と今日の入院代として、オートエーガンの食事を何度かじょうづしてもらひつかひ、やのつもりでね！」

「ええー、わたしのおじいさんのお？」

自分の悪巧みがマイナスに動いてしまい、アルマはよがりよく反省の色をみせる。

アクサと二オはしてせつたじと、軽くハイタッチをしてから別れていった。

その6・三日後……

ウォルガレンの滝破壊未遂の事件から、三日が経過した。マスカーレイドは普段どおりの平和な毎日が続いている。

オートエーガンの店内は開店からまだ時間が経つておらず、いつもの位置にいつもどおりクネスがいるだけだ。

「いらっしゃいませ。あ、ハンターさん！」

現れたハンターに、ニオが明るく声をかける。そばでは白いフリフリのエプロンを着けたシェラが、モップで床を掃除していた。ハンターは顔を曇らせたまま店内へと入ってきた。顔色も悪く、どうも元気がない。

「どうかしたの？」

コップに水を入れて、ハンターの前に出しながらニオが尋ねる。ハンターはぼそりとつぶやいたが、ニオには聞こえなかつた。

「えっ、なんて言ったの？」

「レスチアが無罪になつたって言つたんだ」

「へえ、無罪かあ……つて、無罪！　どうしてよ！」

慌てふためく一オに、ぼそぼそとハンターが話を続ける。

「王都警備部隊つてのがいてな。まあこいつらが各地で起こつた犯罪者を取り調べたり、有罪か無罪かつてのを裁判で判断したりするんだが……どうやらその部隊の上層部に、レスチアと組んでいる輩がいるらしい」

「レスチアと組んでいるって、どううことなの？」

「つまり、ウォルガレンの滝を壊し、ホテルを建てることに賛成だつてわけだ。レスチアがホテルを建てた暁には、相当な額がそいつに転がり込むことだらう」

バンッ！　とカウンターに拳を叩きつけ、ハンターが歯軋りを鳴らす。

「それじゃあ、そいつがいる限りレスチアを有罪にする」とは出来

ない……」

「そうこうことだ。そしてレスチアはいろいろな手段を用いて、ウォルガレンの滝を破壊しに来るだろ？」

「そんな……」

緊迫した雰囲気が、店内を駆け巡る。

と、突然クネスがハンターの元へと歩いてきた。

「気にしなくてもいいんじゃない？ ハンターさん

「どうしてだ？」

ハンターが訪ねると、クネスは事も無げに答えた。

「まず、レスチアは偽の許可証を使って工事をしようとしていた。

ということは、正式な工事の許可を取るのは難しいと考えられる」

「まあ、そうだろうな。王都を統べるシングスマス五世はウォルガレンの滝が大のお気に入りで、時折お忍びで観光に来てるぐらいだからな」

「そうだったの？」

驚きの声を上げたのは二オだ。生まれてからずっとマスカーレイドに住んでいる二オも、王都から王様が来ているなど初耳だった。

「となると、これから先も許可を得ることはないだろう。だったら工事を中止させるのは簡単だ。それに……」

「それに？」

いつの間にかそばに来ていたショラが、会話に参加しようと聞き耳を立てる。

「それに、僕たちはウォルガレンの滝が狙われることを知っているし、レスチアの顔も知っている。滝は日ごろから警備すればいいし、レスチアがマスカーレイドに現れたら警戒を強めることもできる」

三人とも納得したのか、ほおーと感嘆の声を上げる。

「他にも理由はあるぞ……ん？」

「どうかした？」

クネスは口の前で指を立て、二オを黙らせる。そしてポンと手を

打つと、

「そうか、なるほどな。うんうん」

一人で頷いている。三人がどうしていいか迷つていると、クネスは自分の特等席へと戻つていった。

「ちょっと、クネス！」

「そうかそうか……主人公の友人に情報通を入れれば、話がドンドン広がるぞ！」

言いながら原稿に小説を書き進めていく。どうやら小説に使いやすいアイディアが浮かんだらしい。

こうなると当分、クネスは小説の世界から出てこなくなる。周りがまつたく見えなくなるのだ。

「ふーっ、まあ気にしてもしょうがないのかもね」

「そうだな。おれも昔の友人とかに声をかけてみよう。うまくいけばレスチアを無罪にした黒幕が分かるかもしれん」

「昨日の今日で、また来るほどレスチアも馬鹿じゃないだろ？」三人はそれぞれ納得して、それぞれの仕事に戻つた。シェラは掃除、ニオはハンターの注文になるであろうランチ肉抜きを調理しに、そしてハンターはそれを待つ。

数分後、ニオは裏のキッチンからランチを持つて現れた。
「はい、お待ちどうさま。ハンターさん

「んっ？」

ハンターは運ばれてきた食事がいつもと違つことに気がついた。見た目は普通のランチ そう、普通のランチなのだ。

「ニオ、これ肉が抜いてないぞ？」

ハンターが尋ねると、ニオはペロッと舌を出した。

「今日はだけはハンターさんにお仕置きだよ

「おれにお仕置き？ どうして」

「ウォルガレンの滝を売つて、わたしたちを裏切つたお仕置き」

「ちょっと待て。あれは芝居だったんだぞ」

抗議するハンターにもニオは動じず、ニシコリと笑つてみせた。

「そり、だから今日一日だけ。もし本当に裏切つてたなら、出入り禁止になつてたんだから。そう考えたら安いもんでしょ？」

店内の隅で、シェラがクスクスと忍び笑いをしている。ハンターはアランチの肉を突つつきつつ、脇にだけよつとした。

「言つておくけど、オートエーガンでのお残しは、わたしに対する挑戦状として受け取るからね」

口に手を当てつつ高笑いを放つた二オは、裏のキッチンへと入つていった。

「シェラ、こつそり肉だけ食つてくれよ」

ハンターの申し出にシェラは、

「肉の追加なら喜んでするわよ。わたしも傭兵としての職を失つた恨みがあ、る、し」

普普通々と口を閉じたまま笑い続けるシェラ。店内に着いたときよりも、ハンターの顔色が一層悪化していく。

後ろを振り向いてクネスを見るも、やはり小説の世界に入り込んだまま戻つてきていない。

「くう……」

意を決して口の中に肉を放り込む。苦虫を噛み潰したような顔に、こつそり覗きこんでいた二オとシェラの笑声が、豪快にこだまする。今は平和な日々をこなしていくマスカーレイド。だが、これから先、マスカーレイドはいろいろな事件へと巻き込まれていくことになる。

ウォルガレンの滝との共存を望むマスカーレイドの住民の願いそれだけはいつまでも変わらない。たとえ、どんな事件に巻き込まれようとも。

（END）

その6・三日後……（後書き）

初めまして。水鏡樹というものです。

『マスカーレイドに異常なし！？』はいかがだつたでしょうか？このマスカーレイドという街は、個性的な住人の多い面白い（住人にとってはそうでもないかもしませんが……）フュミリーとか（笑））街です。

今後も住人たちの活躍＆災難をどんどん執筆していきたいと思いますので、気に入つていただけた方は時折覗いてもらえると幸いです。

感想などすぐ力になりますので、暇があれば評価＆コメントもお願いします。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5815a/>

マスカーレイドに異常なし！？ 第1話

2010年10月8日15時47分発行